石川三四郎の自由社会主義

——カーペンターとの邂逅をめぐって——

都築忠七
（一橋大学教授・社会思想史）

一九五六年十一月二十八日、日本のアナキズムの先覚者のひとり石川三四郎が、波瀾の多い八十年の生涯の幕をとじた。このとき大沢正道氏は、石川の一生を貫く二つの特徴として、「あらゆる権力的なもの、官僚的なものに対するゆずることのない抵抗と、主義主張にこだわらない人間的な寛容」をあげ、彼が「この二つを生涯をかけて見事に守りぬいた」と『クロハタ』紙上に書いている。このような特質は、エドワード・カーペンターに負うところが少なくない。石川自身、カーペンター著『文明その原因および救治』（世界古典文庫版）訳者序のなかで、「自由社会主義者として独立の生活を樹てさせてくれたものは、バクニンでも、クロポトキンでもなく、実にエドワード・カーペンターその人であった」と回想している。

石川がカーペンターに師事したのは、明治末期から大正にいたる日本社会主義の黎明期であり、現存する両者の往復書簡から、人間的な交友関係とならんで石川のアナキズムないし自由社会主義が自覚的に形成されて行く過程を跡づけることができる。シェフィールド市立図書館のカーペンター・コレクションにおさめられた石川の手紙は二十通にのぼり、他方四十四通の石川にあてたカーペンターの手紙が、石川永子氏の許に保管されている。その公表を快諾された両者に謝意を表したい。

予言者・カーペンター

ところで世俗の名声とは無縁のカーペンターについて、あらかじめ説明を加える必要があるだろう。彼はケンブリッジの聖職のフェローとして学問の道を志し、キリスト教社会主義者J・F・D・モリスのもとで働いたこともあるが、大学と社会の虚偽・欺瞞・空洞化に悩み、辞職し、労働者と生活を共にする決意を固めた。「大不況」のはじまる直前、一八七〇年代のことである。その後ケンブリッジの成人教育運動を通じて知りあった北部労働者の人間的真実にひかれ、シェフィールドに近いダービシア・モアの山間に居をかまえ、自然を友に晴耕雨読の生活を営み、労働者を友として彼らの運動に協力した。そしてモアの自然を思わせるさわやかな文明批判と情熱的な民主主義精神の鼓吹とによって、八〇年代のイギリス社会主義の「復興」に寄与するところが少くなかった。

生存中「予言者」として知られたが、多くの予言者がそうであるようにカーペンターも今日では、忘れられた思想家のひとりに数えられよう。たしかに彼の擁護した具体的な主義主張の多くは、今日では色あせてみえることであろう。煙害にたいする彼の警告は、二十世紀のさらに深刻な公害の下でその意義がうすれたかに見え、彼が弁護した同性愛も、ここ十数年のことではあるが少くともウォルフィンデン報告以来、イギリスでも市民権を認められるようになった。しかしソローとマルクスにならって資本の支配にかわる労働の支配の可能性を追求したカーペンター、文明を病弊または分裂と呼び、自然と真の我と同胞とから人をひきはなすものとして財産を糾弾したカーペンター、その荘重なデモクラシー（個人のなかのデモスの支配）讃歌、自然のユートピアとしてのコミュニズムの擁護は、サンダルの常用や菜食のすすめと同じように味気ないものになったとは思われない。

彼の理想主義は階級闘争を否定せず、むしろそこから生まれるものであった。『イギリスの理想』（一八八四年）のなかで述べているように、今日のイギリスの理想は「他人によりかかって生きること」であり、「社会にたいする債権者となり、他人の労働の施物受領者になること」であり、このようなジェンティリティの理想がイギリスを破産に追いやっている。」

他方、このような文明の欺瞞が「新しい階級闘争」をみちびき、その闘争から、今後数千年にわたって人間社会を支配すべき理想が生まれる。この新しい理想は、「人間労働というひろくて神聖な基礎」の上に確立され、新しいデモクラシーの詩のなかに高く掲げられることであろう。

おそらくカーペンターの真面目は、新しい理想・民主主義の詩人としての活躍であった。代表作『民主主義にむかって』（一八八三年）は地上のミレニアムをうたい、物質的安楽・知的能力・快苦さえとも異った次元の世界、「男女が地上いたるところで立ち上り、自らの身体と関係をもち、自由と喜悦を達成する」世界を描きだした。印象的な詩句を若干拾ってみよう。「村のもっとも遅鈍な飲んだくれが私と対等の人格であることの確かさを知らず、彼を友としていっしょに歩くことに誇りがもてないから、私はこれ以上一言も書かないだろう。そこにこそ私の力があるからだ」「国家や憲法の民主主義は、まずはじめ目の輝きや皮膚の外見として表現されるものの影にすぎない」「世論と流行の奴隷を見た。無知と博学の奴隷を、飲酒と情欲の奴隷を、貞操と不貞の奴隷を見た。……だが自由とは何だ。……私（自由）は生命を与えるもの、幸福である」。カーペンターのデモクラシー讃歌は、要するに真実と同胞愛の讃歌であった。ミレナリアニズムが、中世のミレナリアンのように一揆的・戦闘的であることをやめ、啓蒙の理性とロマンティシズムの情念とを相対化する知恵を学び、善悪と歴史の彼岸をかいまみながら、より多くの光を彼の周囲にひろげて行く、近代的・平和的なミレナリアンの姿をそこにみることができよう。

石川は、カーペンターのこの詩集を手にして「恰も法華経を読んで

居る様な心地」になったという。「或は禅宗高僧の碧巌録提唱でも聞く様な気持になる。此一篇の詩は、実に翁が自分の法悦を歌ったものとして、一種の讃美歌であるとも言える」。石川を最初にとらえたカーペンターの魅力は、このような精神的ないし宗教的な側面であった。

カンペーターとの出会い

石川は日露戦争当時、幸徳秋水や堺利彦ら先輩たちとともに『平民新聞』紙上で非戦論を展開し、平民社解散後は、木下尚江・安部磯雄らとともにキリスト教社会主義を提唱した。一九〇六年日本社会党結成当初、彼が政党批判を行なったことは有名だが、翌一九〇七年一月、党機関紙日刊『平民新聞』の創刊とともにその編集にあたるようになった。

おりから幸徳の「予が思想の変化」の発表に始まる議会政策論と直接行動論の対立のなかで、石川は、そのような議論が「問題」と「人」との関係から多角的に取り上げられるべきだと主張した。両論の可否について、それが「社会主義其ものの上よりして差程重大なりと思はず、「予の憂ふる所は、斯る問題が党の重大問題となる如く然かく組織せられたる党其ものの構造にあり」とのべている（『平民新聞』二六号）。このことは、石川の思想の今後の展開、とくにカーペンターとの親近性を示すものとして興味深い。

ところで二月、社会党は結社を禁止され、四月、機関紙も発行禁止を宣告される。発行兼編集人の石川は、直接行動に関する幸徳の演説記事や足尾銅山への軍隊出動に遺憾の意を表明した党大会報告などのため、一九〇七年四月から一年間、東京監獄および巣鴨監獄につながれる身となった。

獄中の石川は、仏教的・キリスト教的素養と社会主義・アナキズムの思想との葛藤に悩んだようである。このとき彼の疑問に「全面的解決を与えてくれたのがカーペンターであった」と『自叙伝』で述べている。その「解決」は、石川によると「人類の社会生活の変遷とその種々相を、自我分裂の事実によって説明し、内なる統一と外なる統一とを全く不可分のものとし、遂に宇宙意識に復帰することに於いて、無政府にして共同的にして同時に貴族的なる真の民主生活が実現せらるる」とする考え方であり、この説は「従来の宗教思想も社会思想も芸術も農工業も、すべてを一つの熔炉に入れて、新らしい、自由の全一の世界を創造する捷路を明示するもの」であった。

獄中の日誌のなかから宗教・人生に関する部分を収録した彼の著書『虚無の霊光』は、その虚無の名の故に発売禁止の処分をうけたが、その主張は「カーペンター的」といえよう。カーペンターが個的人間と類的人間の統一をうたったように、石川もまた、民主主義の確立は真の我の実現を待たなければならないと述べ、この大なる我、真の我からみた場合、マルクスの階級闘争の理論とクロポトキンの相互扶助の思想が、人類の同一の進化の異なる側面を表明するにすぎないもののように思われた。

出獄後彼はますますカーペンターに心をひかれ、ついに「私は日本のコミュニストです」と胸をふくらませて語りかけた。

進歩のオプティミズム

東京　一九〇九年十二月十四日

親愛なるエドワード・カーペンター様

貴著『文明、その原因と救治』および『愛の完熟』ならびに故クロスビー氏の『詩聖にして予言者エドワード・カーペンター』を読んで以来、あなたに手紙をさしあげたいと心から願ってきました。しかし私は、英語で書くことがたいへん不得手ですので、ながいあいだ書くのをおくらせ、はやる心をおさえてきました。私は、一般に「社会主義者」と呼ばれている日本のコミュニストです。私は約七年間、日本でコミュニズムをひろめてきました。そのうち一年はキリスト教社会主義運動（とくに私がそう名づけたのですが）のなかで、また十三ヵ月は獄中で苦行の生活を送りました。私の新聞が社会秩序を攪乱したかどで、わが専制政府がそうした刑を科したのです。

ところで私は、たいへん長いあいだ、たんなる機械的な唯物論的社会主義およびたんなる議会主義運動に不満を抱いていましたので、先にあげた書物を読み、予言者のようなあなたの姿に接したとき、あたかもオアシスに出あったかのように感じました。尊敬するカーペンター氏よ。あなたの福音を我が国でひろく知らせたいと思います。あなたの『文明』と故クロスビー氏の著作をこの国の言葉に翻訳しているところです。少々脱線するのをお許しください。我が日本国民の現状は、あなたが『民主主義にむかって』のなかで、「眠りを妨げる悔恨の熱病、肉体の苦痛にやつれ青ざめた長い通夜」とうたったところのものです。暗黒の荒地をさまよう現在の日本国民にとってとくに、あなたのすばらしい著作が偉大な導きの光明になるものと信じています。

あなたの他の主要著作を取りよせるよう、外国図書輸入業者に依頼しました。それらを入手するとき、その成果が得られるまえに、私は有頂天になることでしょう。もし手紙を下さるのであれば、たいへん仕合わせに思います。ゴッド・ブレス・ユー。

あなたの忠実な学徒

石川三四郎

私の住所は、日本・東京・淀橋町・角筈七三八。

追伸　*Labour Leader* 八月二十日号の第一頁に発表された「真の民主主義へ」と題するあなたとのインタヴューをたいへん興味ぶかく読みました。

このインタヴューの記事は、石川にたいするカーペンターの魅力をかなりよく伝えているように思われるので、すこし引用してみたい。「あなたは今でもオプティミストですか」という問いにこたえて次のようにカーペンターはいう。

「そうでないことがどうしてできましょう。過去四分の一世紀の進歩だけを考えてみてもおわかりでしょう。進歩は不可避的なものです。ときには我々も意識的に前へ進みますが、それよりももっと多くの場合、おそらく盲目的に進みます。しかし趨勢はいつも前へ向います。……潮がどうみても後へ流れるように見えることもあるでしょうが、それはただ十分な力をあつめて真の民主主義と自由へおし進むためにほかなりません。我々は社会の構成単位として、自分自身の成功または失敗から進歩を判断しがちですが、それは人を誤らせるものです。……たとえば婦人の運動を例にとってごらんなさい。たしかにそれは、この時代のもっとも意味深い徴候のひとつです。」

過去数年間の社会主義の圧倒的な成長も、きわめて驚嘆すべきものです。おそらく我々の一部は、自分たちの進歩の度合に少々しびれを切らしているようです。しかし自分たちの運動は、ごく短期間に、ほとんど乗りこえられないように思われた成長にたいする障碍を克服しました。そしてその成功の大半は、労働党が議会内および国内各地に散在する無数の支部で示した、不断の、精力的な奮闘によるのです。……しかし人類は多くの道を通って前進します。事態がどのような進路をとるかを予言することはいつも不可能です。あるときはユートピアが一日の行進で到着できそうに思われます。またときにはそれが遠くにかすんでみえることもあります。希望の実現にどれほど近づいているかについては何もいえません。わかることは、我々の前にある仕事をしつづけなければならないということだけです。」

長い引用になったが、そこにみられる進歩のオプティミズムは、そのための条件が欠如しているかのように思われる日本において、石川を支える哲学になったのである。

再度の入獄

カーペンターは、一九一〇年二月十八日付の最初の手紙のなかで返事のおくれたことを詫び、次のように書いている。

「世界の彼方からきたあなたのお便りを手にし、この大西洋の岸におけるのと同じ思想、より新しい、より真実の人間社会に関する同じインスピレーションと希望、反動と専制の諸力にたいする同じ闘争と戦闘が、はるかなライジング・サンの国であなた方を動かしていることを知りました。何というすばらしいことでしょう。あなたは又あなたの同志のある人が、社会主義新聞を発行したかどで獄に送られたのを記憶しています。しかしあなたが後悔なさることはないとあえていいたい。こうした運動は、きわめて緩慢に、主として新しい思想の伝播によって進まなければならず、新しい思想が民衆の心のなかで芽をふくためには長い年月がかかります。そこであなたも今すぐ成果を期待してはなりません。他方よき仕事が打棄てられることもありません。いつまでも成果をあげないのではないかと恐れる必要はないと思います。……日本における商業主義の発展はきわめて異様な、その伝統がかくも異なる国民にとってまことに当惑千万なものにちがいありません」。

その間石川は、自由民権運動大阪事件のヒロイン福田英子を助け、日本における婦人解放のための最初の社会主義新聞『世界婦人』をはじめ、自らその編集発行人になった。しかし「墓場」と題する彼自身の論稿をふくむいくつかの記事のため、再び投獄された。その前日、彼はカーペンターに次のように書いている。

一九一〇年三月二十七日

親愛なるエドワード・カーペンター

あなたの親切なお手紙を本日いただき、たいへん嬉しく思います。明日私は監獄に送られることになりました。社会主義新聞を発行したために、四ヵ月の刑と罰金六〇円（六ポンド以上）の判決をうけたからです。私の論文はかなり平和的なものであったにもかかわらず、我が専制的反動政府は、これをたいへん危険なものと感じたようです。

私は、よろこびいさんであなたの『文明』を翻訳してきました。

しかし一方では、第一章をおえたとき、約二十年まえに逐語訳ではないが、とにかくその翻訳が出ていることを知り（カーペンター著民友社編『文明の弊及其救治』（一八九三）、他方、ある文筆家が新訳を完了したが、出版社が政府の発売禁止をおそれ、出版をなお躊躇しているとききました。そのため私自身の仕事を中断しましたが、いつかは完成させるつもりです。そこで私は、オリジナルなものとして『哲人カーペンター』を書きました。

しかしこれさえ、検閲で発売禁止になるのではないかと恐れています。そこで自力でこれを出版しなければならないでしょう。

貴著のなかのもっとも有名な『民主主義にむかって』（一九〇九年の新版と思われる）はまだ届いていません。しかし約一ヵ月後に書店から入手し、こよなくそれを愛でることでしょう。あなたの他の著作も同時に届けられるでしょう。『労働の歌』その他あなたのパンフレットは、最近手に入りました。

スワンの『カーペンター、その人とそのメッセージ』が売り切れたと聞いてたいへん悲しみました。私にはきわめて困難なことですが、あなたのすべての著作を我々日本国民に、我々の言葉で紹介することが、私のもっとも切なる願いです。

明朝入獄するための準備で今なにかと忙しくしています。現在、真夜中この手紙を書いています。ですから修正もしない、ブロークンな私の手紙をお許し下さい。あなたの写真が自宅に配達されれば、ただちに獄中の私に送られるでしょう。暗黒の獄舎であなたの写真を手渡されるのは、何とよろこばしいことでしょう。きたる七月末出獄しますが、そのとき今いちど心からあなたに手紙を書き、私の写真を送ります。

あなたとあなたの友人たちに真心をこめて挨拶を送ります。

あなたの同志

石川三四郎

カーペンターは、獄中の石川を励ますためにペンをとり（一九一〇年五月二十一日付、石川三四郎『哲人カーペンター』にも収録）、彼の『文明』の出版さえできないような日本の状況が「きわめて苛酷かつ暴虐」なものであるとし、次のようにつけ加えた。「現在国民のなかでとくに強力なのは愛国心で、それが反社会主義の口実を作っているように思われます。当地でも国王エドワード七世の死が大きな愛国心の波を作り出しています。しかし人類の将来は、愛国心をこえてヒューマニティへと我々を導きます」。

* * *

敬慕するエドワード・カーペンターよ

一九一〇年八月十日

七月二十八日出獄しました。あなたの手紙が自宅に届き、当局がその部分訳さえ私に渡すのを許さなかったことを獄中で知りました。私が刑に服したところは、東京から約三十マイルの千葉地方の監獄でした。約一ヵ月東京監獄で過したあと、千葉監獄に護送され、そこで二年前に投獄された六人の同志に会いました（『寒村自伝』によ

大逆事件関係者の逮捕がはじまったのは、石川が獄中にいたときである。彼の次の手紙は不吉な予感を伝えている。

れば赤旗事件で検挙された堺・山川・大杉・森岡らと思われる。荒畑・宇都宮はこの年二月出所した)。ここでは独房制がとられています。あなたが『刑務所・警察・刑罰』のなかでいっておられるように、独房制度は「肉体と精神を餓死させる制度」でして、「本当にこのような監獄は、外面的には清潔で、まずまず良好で、秩序正しくはあるが、内面的には死者の骨のいっぱい入った白い納骨堂(偽善者)以外の何ものであろうか」。本当です、本当です。私はそれを経験したのです。

現在の日本の政府は、あらゆる方面でもっとも苛酷な反動政策を固守しているといわれています。たとえば囚人の取扱いは、三年前私が東京要塞、巣鴨監獄にいたときとくらべ、はるかに厳しくなったことは確かです。四ヵ月前私が投獄されたあと、ある同志が重労働七年の刑を宣告され、ほかに十人の同志が逮捕され、そのうち何人かは死刑を宣告されるだろうといわれています。我々社会主義者にとって言論の自由も、著述の自由も、集会の自由もあり得ません。しかし政府の専制政治にもかかわらず、多くの自由思想家が勇敢に戦っており、自由思想の潮が先へ進み、強力なものに成長しつつあります。

私の友人安部磯雄から手紙をうけとられたことと思います(一九一〇年五月二十六日付、カーペンター・コレクション蔵)。あなたのすばらしい写真も獄中の私に手渡されることを禁じられ、看守の監視の下に眺めるだけでした。

故ラフカディオ・ハーンの作品をお読みになったあなたは、我々日本人の生活をよく知っておられることでしょう。一般的にいって我が国は、近代文明によって荒れるにまかされていますが、国民のなかには、古い自然の慣習が多くのこっています。日本人の住宅・衣服その他の生活様式も、いくらか改良されれば非常に健康なものになるでしょう。もっとも最近では、官吏や都市労働者のほとんどが西洋の服や靴を用いるようになっていますが、農村労働者は今でも常時、日本のゆるやかな着物や草履を身につけ、我々にはむしろ健康に思われます。(中略)

獄中私は軽い結核をわずらい、今でも完全に回復してはいません。したがってあまり長い手紙を書くことができません。他日またペンをとります。

私の書物『哲人カーペンター』は、現在、出版人の手にあり、この人はそれとなく検閲官の意見をうかがっています。あなたの『民主主義にむかって』および『創造の芸術』もまもなく届きます。書店の手違いで今日まで遅れ、私もひどく心配しました。

あなたの忠実な友
石川三四郎

石川が次の手紙を書いたのは、幸徳らが処刑されてから二ヵ月近く後のことであった。

一九一一年三月十六日

親愛なるエドワード・カーペンター

ながいあいだ手紙をさしあげずにいました。頑冥な我が政府は、自由思想家・社会主義者・アナキストにたいし、偏執狂的な専制政

治を行ない、同志二十四人が死刑を宣告され、そのうち十二人が去る一月二十四日処刑され、ついでのこりの者が終身刑に減刑されました。このことをあなたにお知らせしなければならない、といつも気にかけていました。しかし私の郵便が政府によって没収ないし開封されることを恐れ、今日まで書くのを遅らせたのです。いずれにせよ事件の詳細を全部書くことはできませんし、この手紙があなたの手許に届くかどうかも確かではありません。故幸徳伝次郎は、天皇の暗殺を企てた(という罪を政府は彼に負わせたのですが)陰謀者の首領として処刑されましたが、彼はクロポトキンの信奉者であり、日本のアナキストの指導者です。彼は日本社会党中央機関紙『平民新聞』(私もこれに関係しました)の編集者のひとりでした。日本の現状は、ドイツにおけるビスマルクの時代ないし(一八四八年)ヨーロッパの反動時代によく似ています。(後略)

あなたの同志
石川三四郎

一九一二年三月八日

親愛なるエドワード・カーペンター

(前略) この書物を書くにあたり、トム・スワン氏の著作、故クロスビー、そしてもちろんあなたの著述や詩を参照しました。この書物が、あなたの著作とあなた自身を我々日本人に推挙するのにきわめて不完全なものであることはいうまでもありません。しかし私は、全霊を打ち込んでこの書物を書いたといえるのです。日本の著述家ヨネ野口氏を御存知ですか。彼は、広告で私の本の刊行を知り、親切にも、本をあなたに送り、その内容を知らせる、と書いてきました。あなたへ送ったのと同時に彼にも一部私の本を送ってありますので、早晩彼も、あなたに手紙と本を送ることでしょう。ですから私のブロークンな英語の手紙よりも彼の手紙から、より詳しい情報が得られることでしょう。

あなたの同志
石川三四郎

住所が変わりました。新しいアドレスは、
日本・横浜・根岸・芝生二一九四です。

ヨネ野口の手紙(一九一二年三月二十三日付)は、石川が期待したような、彼の書物の内容を伝えるものではなかった。ただ本書は「人間社会の改良と近代文明の一般的前進にたいするあなたの貢献を評価する点ですぐれ」とあるが、そのこと自体、問題がなくはない。とにかく石川の書物は好評だったようである。

一九一二年五月二十二日

敬慕するエドワード・カーペンター

四月六日と十二日の御親切なお便りいただきました。私の『哲人

カーペンター』が実際不十分なものであるにもかかわらず、我が思想界にたいへん深い影響を及ぼし、日本の数多い迷える羊たちに高遠な導きの光りをあたえました。あなたのごく最近の著作をどれかひとつ、できれば『愛と死のドラマ』をお送りいただければ幸いです。私の『哲人カーペンター』をもう一部、数日中に出版社から受取りますのでお送りします。『愛と死』をいただいた上で、あらためてお便りします。心から挨拶を送ります。

石川三四郎

カーペンターにあてた石川の手紙がすべて保存されたわけではない。家族についてたずねたと思われる手紙にこたえて、次のようにカーペンターは書いている(一九一二年八月二十七日付)。

「私は結婚しておらず、家族もありません。過去十五年間当地〔シェフィールド近郊ミルソープ〕で年下の友人と暮らしてきました。彼が家事の大半を行ない、二人で家庭を作っています。私の父は海軍の士官でしたが、その後弁護士になりました。父と母はブライトンに引退し、そこで幼い家族(十人の子供たち)を育てたのです。……日本の私の友人すべてに心から挨拶を送り、幸運を祈ります。人間的自由と愛の大義は、地球上でゆっくりと、そして多くの緊張と苦しみを伴いながら、前進しています。落胆してはなりません。最後に勝利をおさめることは確かです。その確実性を友人たちの眼のなかにみることができます」。

しかし緊張と苦しみは大きかった。石川の身辺にも警察のスパイが出入りしたらしく、次のような「内縁ノ妻福田英トノ対話」まで当局の記録するところとなっていた。「今マデ天子様ヲ神様ノ如ク信ジ居リシニ今回十二名ノ死刑ニ処セラレタル結果トシテ天子様モ人ヲ殺スモノナリトノ印象ヲ一般人心ニ与フルニ至レリ云々」(社会文庫編『社会主義者無政府主義者人物研究史料(1)』一九六四年)。当時石川は、福田とともに横浜・根岸に住んでいたが、「幸徳のように絞られてしまいます」と忠告する外国人もあり、堺利彦や横浜駐在ベルギー副領事F・ゴーダルらの斡旋で日本脱出を決行した。一九一三年三月一日のことである。

孤独な亡命者の悲哀

四月七日マルセーユ着、ただちに汽車でブリュッセルにむかい、四月十一日付でカーペンターにあて次のように書いている。「……しばらく当地に滞在します。できるだけ早くあなたを訪ねたいと願っていますが、いくつかの理由で――貧乏なのがその主たるものですが――うかがうことができません。往時の日本人の生活のなかの同性間の友情について、やがてお知らせできるでしょう。日本を出るまえに、この問題について調べるよう友人にたのんでおきました」

この年(一九一三年)十一月、石川は海峡を渡り、ロンドンでカーペンターに会い、数日後シェフィールドに近いミルソープのカーペンターのコテッジを訪ねた。彼自身の印象記やヨーロッパ文明批判は、『自叙伝』や『放浪八年記』などにくわしい。ここでは石川のカーペンターにあてた書簡にしたがいながら、彼の動静を探ってみよう。

訪英後ただちに彼はブリュッセルに帰り、同年十一月二十五日、次のように書いている。

「親愛なる友よ(こう呼んでもよろしいでしょうか)。ドクター・ベイティ〔石川がロンドンで出会った人道主義協会の会員〕から手紙を受取りました。そのなかで彼は、ベルリッツ・スクール〔外国語学校〕、翻訳業者のフラワデュー商会、『コスモポリス』に手紙を書くよう助言してくれました。私は臆病すぎて自分で手紙を書くことができませんし、おそらく成功しないだろうと思います。どうお考えになりますか。サンダル製造場か菜園で仕事を見つけて下さるわけには行きませんか。予期しなかったことですが、今までひきつづき生活費を出してくれた友人が、私のイギリス滞在中に職を失ったためそれができなくなり、今私は途方に暮れています。日本に帰ることはたいへん高価なもので、現在の状態ではきわめて困難です。……当地で職を得る見込がないように思われますので、あなたを煩わすわけですが、御容赦願います」。

早速カーペンターは石川に郵便為替を送り(一九一三年十二月四日)、それによって石川も翌年はじめまでやりくりができたようである。他方、カーペンターの姪の夫でロンドンの銀行につとめるウォーター・クレメントが、ロンドン西部ライスリップの家で石川を泊めることになり、その間カーペンターと友人たちが懸命に仕事を探し廻った。しかし結局、成功しなかった。

一九一四年三月二日付ライスリップからの石川の手紙は、孤独な亡命者の悲哀を伝えている。

「私には計画もありません。私は自分を事態のなりゆきにまかせるより仕方ありません。日本へ帰ることができるかどうかさえ、まだ確信がありません。今南アメリカを旅行しているベルギー人の友人が助けてくれるだろうと期待しています」。

この友人は、有名な地理学者でアナキストのエリゼ・ルクリュの甥、同じく地理学者のポール・ルクリュであった。カーペンター自身も困り果て、ルクリュからの援助の申し出を受けるよう石川に助言した。「長くヨーロッパに滞在できればできるほど、あなたにとって満足の行くものになるでしょう」(一九一四年四月七日付カーペンター書簡)。日本からの手紙も石川にたいし、ヨーロッパにとどまるよう忠告した。「なぜなら日本では私の友人たちが、社会主義とアナキズムについて相互に争っているからで、もし私が日本へ帰れば私にも面倒なことがおきるだろうというのです。しかしそれが私をヨーロッパに滞在させる理由であってはならないと考えます」(一九一四年七月五日ブリュッセル発石川書簡)。

フランスでの農耕生活

大戦勃発当時、石川はブリュッセルで働いていた。その頃彼は、次のようにカーペンターに書き送った(一九一四年八月十五日付)。

「親愛なる友よ、お元気ですか。装飾職人として今も毎日働いています。ドイツとの戦争の結果、〔ほとんど〕すべての作業場が仕事をやめ、従業員は閉め出されました。幸い、私は今なお同じ作業場で働いています。しかしドイツの軍隊が当市に侵入すれば、仕事をつづけることはきわめて困難になるでしょう。そして当市がドイツ軍に占領されるのも間もないことだといわれています。ジョージ・メリル〔カーペンターの家に同居する友人〕によろしく」。

ドイツ軍は八月二十日ブリュッセルに入城したが、石川は翌年はじ

めまで滞在をつづけ、ようやくロンドン経由でパリに移り、その後パリ北方、前線に近いリアンクールで十六ヵ月過した。この頃カーペンターから受け取った葉書の一枚に次のようなものがあった。

「ジョージと私は、かくも悲しい、苦痛にみちた戦争が終わるのを待ち望んでいます。あなたはリアンクールの病院で手伝いなどしていますか。もっと手伝いが必要でしょうか。ジョージと私も、あるいはそちらへ行くかもしれません。われわれは、そうした種類の仕事が欲しいのです」(一九一五年七月十日付)。リアンクールの石川は、ルクリュの友人が疎開したあとの無人の家の管理人だった。

やがて石川は、中央フランス、ドームのルクリュ夫人のもとへおもむき、しばらく農耕の生活を営んだ。ドームで石川は、『我が日、我が夢』と題する自叙伝だと思われるが、カーペンターの新しい書物を受け取った。「……真夜中まで読んだあと、今朝まで本をベッドに入れていました。現在、そのための時間はあまりないのですが、これを日本語に翻訳したいと思っています。しかし日本には、ほかにもたくさん翻訳者がいることでしょう。なぜならあなたはたいへん有名になり、多くの青年があなたについて学びたいと望んでいるからです。……今、人々は、あなたの名前と書物で金もうけを始めています」(一九一六年七月十日付)。

その後しばらくして石川は、カーペンターから「たいへん興味深いパンフレット」を贈られた。おそらく『決して再び』と題する「戦争拒否」の力強い訴えのことであろう。「菜園で忙しくしてきましたが、今では読んだり書いたりする時間がいくらかあります。今すぐこの論文を翻訳したいと思います」(一九一六年十月十日付ドーム)。彼はこの翻訳を一九一七年に発表し、のちに『哲人カーペンター』改訂版(一九二一年)の一章として付け加えている。

さらにもう一点、カーペンターの著作がドームに届いた。「親愛なる友よ、新著『産業的自由にむかって』をいただき、あつく感謝しています。約半分読んだところです。何と興味深い本でしょう。興味をさそうすべての章のなかでもとりわけ〝芸術としての産業〟と〝日常生活の中の美〟を意味深いものと思いました。園丁としての私の日常生活のなかで、農業が真の芸術であり、そうあらねばならないと感じていたところだったからです。園芸と農業においてわれわれは、芸術的・創造的仕事でうまく自然と協力することができます。植物とともに生き、自然とともに働くことのできる小さな土地をもつということは、何と仕合わせなことでしょう」(一九一七年十一月九日ドーム)。ここでカーペンター自身は、個人または集団が、土地および生産手段を自治的に使用できるような社会の仕組みについて語っていたのであり、石川が「小さな土地」を強調したのは、おそらく園丁としての当時の石川の経験(およびミルソープに関する彼の印象)によるものであろう。そしてそれが、彼の自由社会主義をかなりの程度に方向づけたように思われる。

当時石川は、大戦の戦況やサンディカリズムや国際連盟の構想などについてドームから日本へ通信を送ったが、カーペンターにあてた彼の手紙は、このようなジャーナリストとしての活躍にはふれていない。休戦後彼は、健康のすぐれないルクリュ夫人を助けてモロッコで冬をすごし、一九二〇年夏ミルソープに最後の別れを告げ、九月、ロンドンから日本へむかった。

西欧との落差

大戦をはさむ激動の時期に七年半ヨーロッパに滞在したことが、石川にとってはかり知れない大きな意味をもったことはいうまでもない。この時期、アメリカは別として、ヨーロッパとこれほど密接な関係をもった日本の社会主義者は、ほかに見当たらないようである。そのヨーロッパは、ベルギーの「人民会館」やイギリスの婦人解放運動、あるいはフランスのサンディカリズムであったかもしれない。あるいは彼が生活をともにしたルクリュ家とその周辺のアナキズムであっただろう。しかしそれは、基本的にはカーペンターその人であり、その文明論であり、その民主主義の理想であった。帰国した石川は、「マダ一週間を経たぬ内に……此大病の日本にウンザリして来た。アノ『海外発展』も『国威振興』も、能く診察して見れば、実は資本主義といふ文明食を喰ひ過ぎて胃痙攣を突発して、手を張り足を踏んばったに過ぎない」と書いている(『放浪八年記』)。

カーペンターの文明批判は、その鋭い諷刺にもかかわらず、読む者の心にふしぎな安らぎをあたえる。おそらく統一と調和の思想、まがいものでない宗教的な愛の思想が行間からにじみ出ているためであろう。しかし石川は、今、ヨーロッパの経験の上にたって、これと日本の伝統思想との相違に注目した。「日本人は虚無的統一に慣れ、西洋人は実在的統一を好む」と彼はいう(前掲書)。分裂した自我の統一としてのデモクラシーも、カーペンターにあっては、ポジティヴな人間の進化の歴史的プロセスの頂点として考えられたのにたいし、石川が日本人のあいだにみた統一は、否定的な、現世の外にはみ出る、暴力的なものであった。「其寂寞虚無の境界からして、突如として日比谷騒動が勃発し米一揆が破裂するのである」「言論は暴動を緩和するものである。其言論に慣れず、其言論の自由を尊重せざる日本人は、常に沈黙から暴力に飛躍する」とも書いている(前掲書)。

たしかに大沢氏が前出の石川死亡記事のなかで指摘するように、日本のような島国の社会運動家にとって長期間外国に滞在することがマイナスの側面をもつことも否定できない。しかし社会運動のセクショナリズムにたいする彼の批判およびそこからくる超越的な態度は、すでにみたように原理的なものであった。そこで石川は、当時、大杉栄を中心に日本の労働運動の嵐の目になった「アナ・ボル論争」に直接かかわりあうことなく、自らは、カーペンターのデモクラシーを「土民生活」と訳して「土にかえる」立場から、農民の自治的組織や文化運動に専念した。

カーペンターは、産業の村や田園都市を夢みたが、社会改造に関する彼の考え方は、必ずしも農村的ではなく、ほぼアナルコ・サンディカリズムやギルド社会主義の線に沿うものであった。石川自身、協同組合やサンディカリズムを提唱したが、彼の場合、農業ないし牧歌的な民主主義に力点がおかれていたようである。一九二七年、彼は東京西郊千歳村に移って土地の耕作を始めた——東京ミルソープである。

ヴィクトリア中期のイギリス社会の虚偽と分裂と浪費にたいして起ち上ったカーペンターの自由社会主義の精神は、石川と彼のサークルによってわが国にも導入された。しかし、一方では伝統的な虚無思想、他方ではあらゆる種類のコンフォーミズムに行く手を遮られ、その生命を長く維持することができなかったように思われる。